



Case Report

やわびた 硬い凸面装具から変更し、 装着時の違和感が軽減した症例

キーワード

やわらかい凸面、幅広い使用条件、潜在的ニーズを探る、ベルトタブの有用性

はじめに



東京慈恵会医科大学附属病院
皮膚・排泄ケア認定看護師

二宮 友子

1989年に金沢大学医療技術短期大学部看護学科卒業後、東京慈恵会医科大学附属病院に勤務。1998年に皮膚・排泄ケア認定看護師取得。病棟主任、外来師長を経て、2006年より皮膚・排泄ケア認定看護師として専従業務に従事。

当院は1075床を有する特定機能病院で、ストーマ造設数は年間80～90件。高齢者の造設が増えていると感じるが、実際の患者平均年齢は65歳とこの3年間変化がない。これは、高齢者も増える一方で、40～50代の患者も増加していることから、平均年齢に変化が出ない傾向にある。

その幅広い年代や個性のある腹壁や、生活習慣に合わせてストーマ装具を選択するが、近年のストーマ装具は多種多様で選択肢が広がってきている。しかし実際には、もう少し硬い平面装具面板があれば凸面でなくても良いと感じる事や、単品系平面型装具でも良いがアクティブな生活に合わせてストーマベルトを使用するため単品系凸型装具を選択する等、「もう少し」選択肢があればと感じる事もしばしばある。

今回、外周テープ付で単品系のやわらかい凸を有する装具を経験し、この形状は「もう少し」の選択肢になると感じ、その汎用性について検討したので紹介する。

症例：64歳女性

既往歴	腫瘍に対し放射線療法と化学療法を施行。
現病歴	直腸がんに対しハルトマン術施行。
家族背景	夫と二人暮らし。
ADL	自立。
ストーマケア	セルフケア実施。
ストーマサイズ	27×30×3mm

ストーマ装具選択の実際

排泄物は軟便。ストーマはマーキング位置に造設されほぼ正円で、安定した平面が得られる場所であったが高さがなく、全面皮膚保護剤の単品系凸面装具（凸部高さ5mm）を選択した。今後の化学療法での下痢によるストーマ近接部の皮膚障害予防が必要と考え、用手形成皮膚保護剤を面板ストーマ孔部に使用、さらに粘膜浮腫の改善に伴うストーマサイズの変化を考慮しフリーカットを選択した。

72～96時間は安全に装具装着が可能。術後の経過は良好で、セルフケアを習得し2週間で退院となった。外来で化学療法が開始となったが、下痢や手指の痺れの副作用は現時点では発生していない。

術後4ヶ月目のストーマ外来時、面板貼布部に掻痒感の訴えがあった。接触性皮膚炎を示す発赤、発疹等の所見はなく、面板外縁部に軽度の色素沈着を認めた（写真1）。夏の暑い時期でもあり、発汗の影響も考えられた。装具交換ではずいぶん慣れ自信もつき、患者自身が困っているわけではないが、皮膚保護剤の成分変更で、痒みの改善可能性を説明し同意が得られたため、やわびたを試した。

ストーマサイズがほぼ安定していたため、フリーカットからプレカット30mmへ、また化学療法での便性変化がなかったことを考慮し、用手形成皮膚保護剤を中止し、ケアの工程を減らした。

用手形成皮膚保護剤の準備やカットの手間が省けたことは、「ラクしていいの?」と喜ばれた。更に装具を持ち「これ、軽いですね!」と言われ、その場で装着した時には「前のはいかにも付けてるって感じだったけど、やわびたはやわらかいわ!」と好感触だった。

写真2、3、4はやわびた使用後初めてのストーマ外来での状況。前日の夜に装具交換をしていたため16時間後の面板の膨潤だが、全く便の潜りこみはなく、やわらかい凸面でもしっかり密着が得られていることがわかる。患者は「付けているのを忘れるくらいの感触なのよ」と高く評価し、皮膚保護剤の成分変更に伴い痒みもなくなったため、継続してやわびたを使用した。



写真1

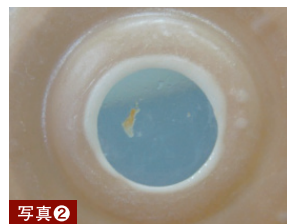


写真2

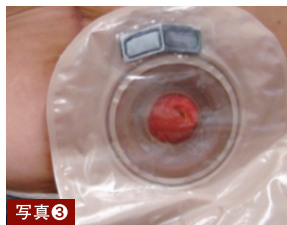


写真3



写真4

考察

やわらかい凸面のやわびたは、5mmの硬い凸面装具が必要な高さが低いストーマでも同様の密着が得られることがわかった。ハルトマン術で便性に水分が少なく、腹壁が平坦であったことも一つの要因であったと考える。しかし、患者はやわびたと硬い凸面装具の装着感に関して、面板のやわらかさに大きく違いを感じており、やわびたが体動時の体幹の屈曲やねじれに対し、柔軟に変化する効果を発揮したと考えられる。

今回、装具交換のきっかけは皮膚保護剤による痒みであった。皮膚保護剤との相性は患者個別にあるが、患者にとって慣れた装具を変更する事は、看護師として迷いが生じることがある。このケースでは、患者の理解力やセルフケア能力は全く問題がなく、現状にある程度満足し、大きく困っている事はなくても、患者は他の製品を試してみたい思いを持っている可能性がある事を改めて理解することができた。

まとめ

これまでは、ストーマに高さが無い場合は硬い凸面は必須で、多少の違和感は生じるものとして、問題として取り上げてこなかったところがある。一方、ストーマに高さが十分あるケースでも、アクティブに仕事やスポーツを継続するために、ベルトを使用する際には、単品系凸面装具か、二品系平面装具を選択しなければベルトタブがなかった。

今回、外周テープ付のやわびたを経験し、硬い凸面では得られない体動時の柔軟性と、平面型装具では得られないストーマ近接部の密着性を兼ね備えた装具として、幅広いストーマと腹壁条件に使用できると考える。

看護師は外来での継続ケアを通して、患者の潜在的なニーズを把握し、より良い日常生活のため他の装具を紹介できるような、装具に対する知識とストーマおよび腹壁のアセスメント力が必要だと考える。